

が鉄道沿いにある光景もこの一つの特徴です。

また、市の人口構成も雑多で、英国系の外、フランス系、ウクライナ系、ドイツ系、ポーランド系が目立ちます。これを反映し、尖塔に特徴あるウクライナ正教会堂やウクライナ・ギリシア・カトリック教会堂の建物が目につきます。この外にも、種々な人種や宗教の表われとして、回教徒のモスクやモルモン・テンプルなどが市内にはあり、因みに、この市長はモルモン教徒といった具合です。更に、市の郊外には Hutterites のコミュ

ニティがあり、彼らはキリスト教徒の一派で、自給自足・質実剛建の伝統を守って暮らしています。一例を挙げますと、服装は黒っぽい色をした質素なものが主体となっております。驚いたことにはこの Hutterites 共同体のモデルが、日本の郡山市の「イゼキ」教会を中心とする人々で実行されていることが、*Canadian Geographic* 1979年4/5月号に記載されており、思い掛け無い所で、カナダと日本が結びついている事実に感心致しました。

(院・博士課程 在カナダ)

落ちこぼれっこと共に

杉木良子

この4、5年来、いわゆる「落ちこぼれっ子」の高校受験の為の個人指導を頼まれることが多い。何はともあれ、親子共に面接してから引き受けるか否かを決めるわけであるが、親がどんなに一生懸命でも本人にやる気のない場合は断ることにしている。親は、何とかやる気だけでも起こさせてほしいと哀願するが、そんなに簡単にやる気が起る薬などあるう筈もない。本人の「これから一生懸命勉強して高校へ行きたい。」とか「心を入れかえて、この一年間は頑張ってみる。」とかいう台詞に弱い私は断りきれず、受験までの一年間のつき合いが始まるわけである。しかし、今まで家で机に向かう習慣も基礎学力もない子供であるから、私の指導能力から考えて定員を一名にしてあるので早くから予約を申込まれることもある。私が曲がりなりにも20年以上も教職にあるということで、地獄で仏に会ったようにほっとした顔付の母親と、身体ばかりは大きく育っても屠所の羊のように元気をなくし母親の隣にうなだれて座っている子供との何と対照的なことか。子供にとっては、まさに地獄での生活が待ち受けているわけである。

小集団の塾でもついていけないために個人指導を求めてくるわけであるから、学校の成績も当然のこと乍ら5段階評価で2か1というところ。希望教科も高校受験ともなれば英・数・国と決まっているが、私自身の都合で国語は面倒みないこと

にしている。そして残る二教科を平行してみてほしい、というのが親子共々の要望であるが、初めからそんな事をしたら虹蜂取らずになってしまうので、初めは1教科にしぼって一年生の最初からできるだけ丁寧に飽きる程の反復練習で明け暮れる。今までの乏しい経験から言えば、一般に数学より英語の方が落ちこぼれてきた期間が短い(英語は中1と中2の2年間だけであるが、数学は小4、5、6、中1、2の5年間)だけに成績を浮上させるのに時間がかゝらない。2だった成績が3になり(中には更に次の学期には4になる子供もいる)少しでも自信がついてくるようになると本人もやゝ意欲的になってきて他教科もという段取りになるのだが、もうその頃は入試も間近で実際には二教科をこなすのは至難の業である。

前述したように定員が極めて限られているので1年間もつき合ってきた子供は実際に少ないが、その前の段階である面接、あるいは相談などで多くの「落ちこぼれっ子」とその母親達に会うことができた。わが家を訪れたこれら「落ちこぼれっ子」は知能も普通、応答もきちんとできるし、運動も好き、というような極く普通の少年達であるが、驚いたことには、小学校時代から全く読書をしたことがなく、このことは彼等の国語の力が小学校の3、4年でストップしていることと併せて、英・数のおくれに大きく響いている。私は、彼等

の育てられた家庭や学校に人間的配慮の欠けていたことを憤る。小学校では国語の時間だけではなく折にふれ母国語をもっときめ細かく指導すべきで、それが担任教師の仕事ではなからうか。また、幼児期に、母親（又はそれに代わるべき人）は毎日子供達に本を読んで聞かせてやったのだろうか。TVに子守りをさせたり、逆に母親自身TVを楽しむために就寝前の子供に落ちついて本を読んでやらない親が増えてきたといわれるが……。聞いてみると、案の定わが家に入出入りする「落ちこぼれっ子」達も殆んどがこの読み聞かせの経験に乏しく、本に対する興味が持てぬまゝに今日に至ってしまったようである。落ちこぼれ防止のための手立てはいろいろ考えられるが、読書の果す役割

はかなり大きいと思う。読み聞かせから次第に本に対する興味を持ち始める時期は多くの場合、小学校入学前後であろう。「落ちこぼすのは学校だ。」とよく言われるが、このようなことから、幼時における家庭でのほんの一寸した配慮が大切だと思う。しかし、これは私が教師をしているから教師としての言い訳なのだろうか、落ちこぼれはやはり学校だけに責任があるのだろうか。

今年もまた一人の「落ちこぼれっ子」と共に過ごし、教師としていろいろ考えさせられることが多く、自分にとっても教育について勉強する良い機会だと思う此の頃である。

(3回生 三輪田学園講師)

思いつくまま

鈴木純子

お恥しいことに、学生時代にはほとんど図書館というものに縁なく過してしまった私が、国立国会図書館に勤めるようになって、昨春で20年になりました(卒業後1年間司書養成機関に通ったので、卒業年度と1年のズレがあります)。

図書館利用の経験は乏しいながら、本は好きだし、どちらかといえば女性むきの仕事に見える、教師になるのはいささか重荷等々考え合わせての、お世辞にも積極的、意欲的とはいえない選択だったように思いますが、共働き、子持ちの先輩たちに恵まれ、同じようなコースをとって、いつの間にか日が経ったという感じです。20年前といえば、今在学中の方々が赤ちゃんの頃というわけです。と書いて、日頃はなるがままにまかせてあまり意識しないでいる馬令を改めて目前につきつけられた感があり、がく然としております。

20年前には、図書館といえば勉強部屋代りに使う学生の行列が話題になる程度、一般的なイメージとしては、何やらカビ臭い紙魚の巣といったところだったように思いますが、ちょうどその頃から、中小地域単位の公共図書館の、館外貸出しを中心にした活動が活発となり、イメージチェンジ

がかなり進みました。

皆様やお子様方の中にも、居住地域の図書館を利用しておいでの方が、今では多いのではないのでしょうか。

図書館といえばこの他、学校図書館、大学図書館、研究機関や企業内の専門図書館などさまざまな館種がありますが、私の勤める国立国会図書館は、現在のところ、日本にただ一つの国立図書館であり、その規模や果すべき役割の多岐にわたっている点で、特異な存在といえましょう。

私は現在、「地図室」という所で仕事をしていますが、ここは、この図書館に大量に入って来る図書・雑誌の受入、整理、閲覧という大きな本流から派生する小さな一水脈とでも申せましょうか。大学で地理を勉強した？ことが、仕事の上でどれだけ役立っているか、まことに心もとない限りですが、傍系の小人数のセクションのため、仕事も巨大な歯車の一部という感じはあまりせず、よい職場だと思っています。もちろん、小人数ゆえの拘束もないわけではありませんが。

人によっては、「図書館には地図もあるの？」といわれる位ですが、新旧、各地域、各縮尺のさ